茂山千五郎家

Kyogen 狂言

鎌腹

舟船

猫と内

茂山千五郎

茂山 宗彦

茂山 茂

松本 薫

鈴木 実

山下 守久

お豆腐狂言　茂山千五郎家

SHIGEYAMA **OTOFU** KYOGEN

茂山千五郎家では「お豆腐のような狂言師」という言葉が語り伝えられています。その言葉は、十世正重（二世千作）への悪口に由来しております。

正重は、気軽に狂言を楽しんで頂こうと、色々なところに出向いては、余興に狂言を上演しておりました。室町時代に“武家式楽”と位置づけられて以降、能と狂言は武士や公家など特別階級の文化でありました。明治時代でもまだ、能舞台以外での上演はいけない、他のジャンルの芸能と共演してはいけないなど、保守的な考え方が根強かったころ、タブーを犯して活動する正重は「あいつはどこにでも気軽に出て行く、お豆腐のような奴だ」と言われていました。「茂山の狂言は我々のやっている特別な芸能文化ではなく、どこの家の食卓にも上がる豆腐のような安い奴らや」という意味の悪口を言われたのでした。

しかし正重は「お豆腐で結構。それ自体高価でも上等でもないが、味つけによって高級な味にもなれば、庶民の味にもなる。お豆腐のようにどんな所でも喜んでいただける狂言を演じればよい。より美味しいお豆腐になることに努力すればよい」と、その悪口を逆手にとりました。

いつの世も、どなたからも広く愛される、飽きのこない、そして味わい深い。そんな「お豆腐狂言」をお楽しみください。

鎌腹（かまばら）

急け者の夫と働き者の女房との壮絶な夫婦喧嘩から、この狂言は始まります。今日も大喧嘩をしながら夫婦が登場します。しかし、今日は近所の顔役が仲裁に入り、なんとか喧嘩はおさまりました。「近所の衆も皆後ろ指をさして笑っている。今後、夫婦喧嘩をしても二度と仲裁には入らないから仲良くするように」と忠告して、顔役は帰っていきます。その後、夫は女房の言い付けで、やむなく山へ木を切りに出かけます。そこで男はふと考えました。誰にも仲裁に入ってもらえなければ、いっかは女房に打ち殺される。同じ死ぬ命ならば、男らしく自ら命を絶とうとします。しかし根が臆病な夫は、死ぬ方法を色々工夫しますがなかなか死にきることができず・・・。駄目男とわがしい女房、亭主を罵るがとても愛している。現代にも通じる世界です。

新作狂言　猫と月（ねこつき）

原作　W．Bイェイツ　訳　佐野哲郎　演出　松本薫

目の見えない物乞いが足の悪い物乞いを背負い、聖コールマンの泉に向かっています。聖なる泉に到着すると、本当に聖者が現れました。「望みは何か」という聖者に、目の見えない物乞いは目が見えるように、また足の悪い物乞いは祝福を受けることを願います。それぞれの願いが叶った二人は・・・。

アイルランドの国民的詩人でノーベル文学賞作家のW．B．イェイツが狂言に影響を受けて作った戯曲「猫と月」を、新作狂言として2015年初演、2017年にはイェイツの母国アイルランドでも上演しました。

舟盗人（ふねぬすび）

主人と太郎冠者が西宮へ遊びに行く途中、神崎川にさしかかります。そこで太郎冠者は遠くに見える「舟」を呼ぼうと「ほーい、ふなやー」と呼びます。しかし主人は、あれは「ふなー」ではなく「ふねー」だと言って注意します。お互いに古歌を引いてきて、どちらが呼ぶのかで口論となります。最後に主人は「ふねー」と呼ぶのかー「ふなー」と呼ぶのかで口論となります。最後に主人は「ふねー」と謡う謡の一節を思いつきますが・・・。小賢しい太郎冠者を扱った曲ですが、小名ながらも軽妙な味わいの感じられる作品です。

２０２２年
第３２８回 **旭川市民劇場９月例会**

９月５日㊊ 午後6:30
６日㊋ 午後1:30

会場／旭川市公会堂　上演時間 1時間４５分（休憩１５分含む）

入会のご案内

入会金	2,000円	会員になると年6回の演劇を鑑賞できます。詳しくは旭川市民劇場まで
会費(月)	一般2,500円	
	大学生1,000円	
	中高生 500円	

次例会のご案内

2022年10月例会
青年劇場
『きみはいくさに征ったけれど』
作／大西弘記
出演／島野仲代　中川為久朗
10月12日(水)午後6:30
13日(木)午後1:30
会場／旭川市公会堂

旭川市民劇場　旭川市３条通８丁目緑橋ビル1号館２F
TEL 0166-23-1655